No. 12
1985. 12.

図書館だより

上田女子短期大学附属図書館

追　　想

福　沢　武　一

一

高校の図書館は講堂の北側に付設されていた。足繁く通った。詩集を借り出すことが第一要件だった。

当時、僕は人生懐疑にとりつかれていた。暗い心を詩にまぎらした。なにになれなくても、詩人にだけはなりたかった。（それは人生で一番ゼイタクな夢だ。）

独立した書庫は赤煉瓦造りで、ツタにおおわれていた。あつらえ向きな詩題だった。

ある夏休み中のこと、すでに大学生だったかも知れない。――ふるさとの上伊那図書館へいった。児童読物だけは開架式になっていた。何気なく手にした一冊はワシリ・エロシェンコの「夜明け前の歌」だった。初対面なのだが、感動したな。大人の童話だ。「鶯の心」「せまい檻」は、生きる意味を見失った僕を生き返らせるほどの力をもっていた。

エロシェンコは童話表現の魅力を植えつけてくれた。人間としての魅力も抜群だった。彼は白系ロシア人だ。生来の盲人で、シベリア・満州・東京と漂泊して来、日本語で「夜明け前の歌」を書いた。やがて日本にも永住できず、中国・インドを経由して、ヨーロッパへ帰還した。その間にエスペラント語で詩や童話劇を書いて出版した。昭和27年、ふるさとで永眠したという。彼の生の軌跡は驚異だ。

さて、僕の大学生時代は懐疑で明け暮れた。いつ晴れるとも知れなかった。

大学の図書館も詩集を読む場所だった。ゴシック風の室内に冷たい空気がよどんでいた。ただ高い屋上だけが気を晴らしてくれた。ある時、学友の関戸君とそこで東京の屋根の海を見渡していた。ふと、火見楼が目にとまった。見張り番の男が1人、楼上の狭い空間を小止みなく巡回していた。僕たち2人は期せずしてつぶやいた。

――ダル！

それはけだし僕たち自身の心象風景にほかならなかった。

二

図書館のことを綴ろうというのに、建物や屋上では仕方がない。その仕方のないような話を、も一つしなければならない。

僕の専攻は哲学科だった。在学している内に気がついた。興味をつなげるものは国文学しか

なくなっていた。あれこれとその方の講座に出席した。その中で、久松先生のゼミは忘れられない。学年末にレポートを提出することになった。万葉巻三の任意の一首を選べばいいのだった。僕は次の歌に決めた。

ともし火の明石大門(おほと)に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず(254歌　人麿)

一首の意は、(ともし火の－枕詞)明石海峡を通過する頃には、いよいよ家郷の大和の山々とも別れることとなるであらう。その頃には家郷の大和も、もう見えなくなる、といふのである。(斎藤茂吉「万葉秀歌」)

訳文を一例挙げた。本文には「入らむ日」とあって、訳の方は「頃」と言い換えている。これはおかしいと思った。それは「万葉秀歌」に限らない。黒白を決める必要に迫られた。

国文科の研究室へ根気よく通った。壁という壁は書棚で埋まっていて、無数の資料が自由な閲覧にまかされていた。上記の主題歌に関する限りをノートした。答えは、さし迫った「頃」であり、「今現在」になっていた。そこに例外はなかった。

「入らむ日」は作歌時よりも何日か前、最少限数日は前だ。――ここに私解が成立し、僕の万葉論考第1号が誕生した。「人麿批判のカルテ」と命名した。

これを特記したい。このとき研究方法といったものを自得したのだから。

以上は曲りなりにも図書館関係の一話と呼べそうだ。各研究室は大学図書館の分室の形式をとっているからだ。

三

大学を卒業し、県内へ赴任した。所が長野市だったことは僕に幸いした。南信生まれの僕はたちまち方言のとりこにされてしまった。南北でいたく相違していると共に、根元では有機的につながっていることに驚かされた。一つ簡単な例を挙げよう。

アッコ(かかと)　南信・木曽・中信

アッコと言いならわしていても、その原義を僕は知らなかった。同じものが長野市周辺でアックエだった。これは古辞典に次のようにあるのと一つなのだ。

クユ・コユ・ケル(足でける)名義抄

アコエ・コユ(鶏のけづめ)同書

アは足、クエ・コエはケルこと。アコエは鶏のけづめだし、人間のかかとなのだ。アクエはアックエ・アッコエ・アッコ等々と変化した。

もはや県下全体の方言調査をしないではいられなくなった。まず調査簿の作成にせまられた。県立図書館の方言書を活用する便宜があった。これがなにより幸いなことだった。それ以来、恐らく死ぬまで、方言研究は僕の重荷になった。有難迷惑のような物言いをする僕の気持ちは、わかってもらえまい。

わかってもらえまいといえば、僕がとりつかれた懐疑もわかってもらえまい。人間はなぜ生きるのか、を知りたかった。生きる目的・根拠が見出せないで、行動停止しかなかった。

狂おしい年月の後、自分に言い聴かせることができた。――生きる目的・根拠、そんなものはない。ないからいいのだ。自分で目的を立てて生きろ。

自律的に生きる姿勢をとった。それは大学卒業直前のことだ。次の短詩が一生の座右銘になった。

足もとの深淵は覚悟。
――流れ藻の花咲かしめむとす。

四

田舎へ舞いもどって痛感した不満が幾つかある。その一つは図書館の不備なことだ。もちろん私蔵することを心掛けねばならぬ。それにも限度がある。たとえば、万葉関係は大部そろった。それだけに、その他の方面が手薄になるといった具合である。

久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ（古今集84歌　紀友則）

百人一首にもとられた名歌だ。次のようにドウシテを補って通解されている。

……（どうしてこのように）落ちついた心もなく花が散っているのだろう。（岩波古典文学大系本）

これはおかしい。そう思って、大学在学中に、例の研究室でメモをとった。後年、そのメモをたよりに論考を完成させようとした。資料の不足を補う必要があった。そうした文献を備えた図書館は田舎にはなかった。改めて大学の研究室の有難味に思い及んだ。

例外がある。

僕が屋代高校に勤めていたのは20数年前になる。そこの附属図書館で貴重な発見をした。イーリヤ・トルストイの訳本「子の見たる父トルストイ」が備えつけてあった。大正3年に出版された粗末な文庫版である。何が貴重かといえば、これが芥川竜之介の短篇「山鴫」の基本的な出典なのだ。芥川研究家の第一人者だった吉田精一氏はそれをご存知なかった。だれも知らないようだ。その点、芥川の作品論に大幅な改訂が必要だ。

先年、ついでがあって屋代高校を訪れ、図書館へ通してもらった。館員は変っていたが、室内の様子はほとんど記憶のままだった。ところが、悲しいかな、わがトルストイ伝は不要品として廃棄されていた。それがありさえしたら、すばらしい論文ができたはずなのに……。

も一つ、残念事を記さなくてはならぬ。

ふるさとの上伊那図書館へはしばしば顔を出す。その度に、なごり惜しい思いを繰返している。エロシェンコはもういないのだ。よごれていたのか、破れていたのか、「夜明け前の歌」は消えてなくなった。あるいは戦争中に、敵性を疑われて、生前に国外へ放逐されたように、追放されたのかも知れない。

それにしても惜しいことをした。46版の、200ペイジほどの本だった。見開きに中村ツネの有名な「エロシェンコ像」が写真で飾られていた。内容は忘れてしまったが、秋田雨雀の序文があった。戦後、高杉一郎氏の尽力によってエロシェンコ全集三巻が出版された。そこには全作品が網羅されている。しかし「夜明け前の歌」の配列は崩され、単行本の感銘は失われている。僕が逢いたいのは、青年時代に見たままのその姿だ。

あるいは青年時代の僕自身に逢いたがっているのかも知れない。

五

最後に、話は本学の図書館になる。まだ追想の手前である。いずれは追想に組み入れられる事項だ。

佐々木信綱博士の評釈万葉集が本学の附属図書館には全七巻がそろっている。（第七巻は国会図書館にもないのだよ。）早速次の歌解を筆写させてもらった。

春雨にもえし楊か梅の花共におくれぬ
常のものかも　（3903　書持）

立ち入って解説する余裕はないが、上記の巻六には独自な、そして唯一最善の解釈が示されている。これ一つでも忘れ難い恩恵である。更に二つ、三つといわず、幾つも追想の種子をたくわえるように心掛けたい。　（教授）

本学の先生の新刊

『説話文学小考』　西尾光一著

教育出版　昭和60年10月発行　7,500円

説話文学に関する評論・随想など20編を収載した珠玉の論文集。

著者の名著『中世説話文学論』以降、20年間にわたって研鑽に努めた成果を世に問う書。

説話文学の成立と本質を追求し、各作品の真髄に迫る。研究者・学生必読の書。

図書館ゲリラ

三田英彬

「図書館ゲリラ」と仮に題してみたけれど、私のおそまつな体験史のなかのゲリラ的側面をなるべくその側へ寄せて記してみようかという程度の話である。学生に益することになるか、マイナスに結果するかは、書き終えてみなければわからない。

私の故郷は函館市で、高校時代は、市内にあったCIE図書館をよく活用した。進駐軍が開設した図書館である。放課後、市電に乗り商工会議所前で降り、アメリカ人たちがペンキを塗りかえただけのぼろビルへ行く。なに「活用」とえらそうなことを記したが、実は勉強の場所を借りに行くだけなのだ。小べやがいくつかあって、アメリカの雑誌や本が棚には並んでいる。これらは退屈すると、パラパラと眺めるだけだった。同級生もけっこういっしょだったし、アメリカ人の館員は、いつも「どうぞ、どうぞ」という感じであった。

市立図書館は公園内にある古い建物で、なんとなくしんきくさい雰囲気。開架式ではなかったので、借り出してみても、こちらのねらいからはずれた本を受け取ってみたり、よく失敗した。ただわれわれにはうかがい知れない書庫と呼ばれるところが、なぜか神秘的に思えた印象がある。

市中の分館へも行ったが、ここは開架式の部分もあり、読書の秋ということであったか、棚から本を抜き出すポーズを強いられ、カメラマンに撮影され、翌日の新聞に載ったことがある。「後ろ姿で助かったな」と、同級生からは冷やかされた。

そこまではよかったが、ここの図書館でとんだ失敗をしている。一階に流し台があったのだが、そこで下駄ばきの足を洗っていたら、突然どやされた。どうせ雑布バケツの水だってここで棄てるのだろうくらいのつもりで、どっこいしょとばかり、片足をあげて洗っていたら、叱られたのだ。館員のほうでは、食べ物を調理する流し台で、なんたることかと思ったのかも知れない。

以上記してくると、いかにも勉強していたみたいだけれど、これは逆で、ときどきのことである。もっぱら机を借りに行ったにすぎないのは事実だが、級友にも同じ事をやっている者は多かった。本学の図書館にしても、そんなかたちで利用したって一向にかまわないはずで、せっかく月謝を納めている以上、大いに活用したらよいと思う。

大学時代には、金がなくなるとよく本を古本屋に売った。本が金欠時の保険みたいであったがしかし、そのたびにがっかりした。別に本が惜しいのではなく、二束三文に叩かれてしまうからである。さすがに図書館から借りた本までは売らなかった。（アタリマエダ！）

私は学生時代から、全集の名のつくものをそろえる気はなかった——というとカッコつけたみたいだけど、つまりは金がなかったのである。

このヘキは後年フリー・ライターになってから、一層ひどくなった。私の本棚を見て呆れはてた友人がいる。「まったくばらばらだなあ」と。必要に迫られて、手当りしだいに買う。それがたとえば政治問題であったり、殺人事件に関するものであったりで、要するに駄本の集積なのだ。ホットな新刊は図書館にはないことが多いせいでもある。文学全集だったとしても、なるべくなら必要な巻しか買わず、図書館へ借りに行くとか、万止むをえざるときにしかそろえなかった。

フリーの時代に、ここそは宝の山だと思ったのは、別に国立国会図書館などではなく、故大宅壮一の邸宅を改造した大宅文庫だった。ふつうならクズ屋行きとなるはずの週刊誌・月刊誌にしても、大方バック・ナンバーがそろっている。人名でも件名からでも引ける。たとえばロッキード事件とか田中角栄とかの検索カードはかなりな枚数である。コピー代だけでもあっというまに1万円を越えてしまう。同じ意味では読売新聞社の資料室も、「週刊読売」で「人間ドラマ」というシリーズを連載していたときは重宝だった。個人別に、古くからの新聞の切り抜きが、1つの袋にどっそり入っていたりする。

区立や市立の図書館でも、館員と顔見知りになっていると、書庫へ入れてもらえることがある。私は横須賀市立図書館で、窓ガラスに気づかず、外の風景をよく見ようとして顔をぶつけ、大型の窓ガラスを1枚割ってしまったことがある。ヒタイのほうは無事だったし、顔見知りだったせいか？　ガラス代も請求されないですんだ。

国学院大の講師になったとき、いちばんトクをしたことは、書庫へ直接入れるし、いっぺんに借り出せる冊数も15冊までであったか……ということであった。講義には関係のない美術関係の本もよく借りた。絵の原色版などは、コピーしても無意味だし、車で来たときに借り出した。

国文学関係で思い出すことといえば、泉鏡花の自筆原稿が、68部、久保田万太郎の世話で、慶大に寄贈されてあった。これらの調査・解題を、今は慶大教授、中京大教授となっている先輩たちと三人で担当したことであった。昭和36か37年のことだが、それまでは空襲を避けて、慶応女子高校の金庫に、福沢諭吉の遺品とともに収蔵されたままとのことで、容易には見ることができなかった。これを慶大図書館へ移してもらった。自筆原稿は鏡花の友人でもあった鏑木清方の題簽染筆により装丁されたりっぱなものであった。

これらを岩波版全集本と校合するのだが、私は問題の多い初期を担当させられた。なかには、「義血俠血」の原稿が二部存し、さらに安田家（旧安田財閥）蔵（当時行方不明）の原稿もあることとて、当時、「東京新聞」で問題にされた。師の尾崎紅葉による加筆・改変と、鏡花自身のそれとのちがい等、疑問点の多い作品なのである。

現在は寄贈時の約束どおり、図書館内に鏡花室が設けられ、遺品等が展示されているとのことだが、私は見ていない。図書館にはそんな機能もあるということなのであろう。

そのころと同じ学研時代に、どうしてか私は、大関早苗編『BG入門』（荒地出版社）という本の三章分くらいを書いているのだが、これは実際にはフリーの編集者の友人が編んだもの。彼から乞われるままに、学研の資料室からBG（今ふうにいえばOL）関係の資料や写真を借り出し、彼に預けたが、あとで思えば、それがねらいでもあったらしく、態よく利用された気配があった。これもゲリラ的活用法だったのであろう。　（教授）

本学の先生の新刊

『理性と愛と象徴』

ヤスパース著　小倉志祥・松田幸子訳
理想社　昭和60年9月発行　3,000円

本書はヤスパースの主著、『真理について』の最終篇「真理存在の完結」の初めての邦訳である。時間的に有限な人間にとって、生きることの真理すなわち実存の真理は、理性と愛を根拠とする。「愛しながらの争いの交わり」のうちでのみ開示されると説く。愛しながら、しかも争うというパラドックス的な内容の説明がこの本の核心となっている。

創作オペレッタ思い出の記

北村恵子

創作オペレッタの活動を始めたのは昭和50年だから、今年で11回目を数えた事になる。ちょうど、うたのおばさんの松田トシさんが副学長として本学にいた頃である。松田トシさんは当時音楽会に2年生の声の良い子だけを選んで、サウンド・オブ・ミュージックの曲を歌わせたり、又インドネシアの輸出禁止の楽器アンクロンを合奏させたりしていた。（この楽器は先生が特別に贈られたものときいている。）アンクロンの合奏は当時大変めずらしかったので、NBSやNHKで全国放送されたりした。

さて私は松田トシ先生が「あなたのやりたいと思っている事をどんどん計画しておやりなさい」との助言を得て、いよいよ第1回目の創作オペレッタに挑戦した。第1回目は「小僧と鬼婆」という題であった。以前附属幼稚園の先生をしていた手塚美恵子さんが鬼婆の役、ピアノ伴奏は長野から通学していた寺沢紀子さんであった。寺沢さんの妹の由美子さんは、数年前、不幸にも殺人事件の対象となってしまい、あの事件の報道を耳にするたびに胸がしめつけられる思いをした。

だいたい卒業生については、成績が良かったとか悪かったとかは全く記憶に残らず、性格的に良い子だった等と覚えている事が多いのだが、私の場合はオペレッタに力を入れていた子が記憶に残っている。役になった子は名前は忘れても役の名前ですぐ頭に浮んでくる。もっとも、ビデオを見れば学生時代の彼女等にいつでもすぐ会う事が出来る。そして今でも第1回目のメロディーが浮んでくる。「タンツク　タンツク　小僧よタンツク　起きてババアのつらを見ろ……」

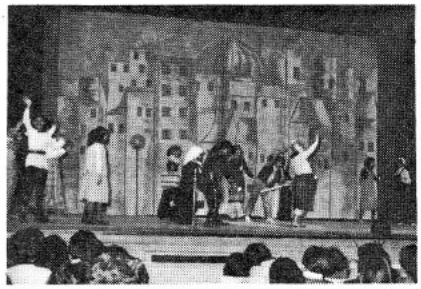
学生達は、この活動に大いなる充実感を味わっており、上田女子短大へ来て本当に良かったとまで言い切る。この活動をなぜ始めたか、とよく聞かれるが、総合的な活動として学生のやりがいのあるもの、そして音楽的な力も伸ばせるもの、保育者になるために資質を養えるものとして考えてみたのが創作オペレッタであった。はじめはグループ活動として何でも好きなものを発表させていた頃もあった。その時は合奏あり、人形劇あり、オペレッタあり、様々であったが、次の年みんなオペレッタをやりたがった。かくして第1回目の発表となった訳である。いずれも2年生の活動として位置ずけた。

しかし今思い返してみると、当時の作品は作曲にしろ、他の事にしろ、とに角洗練されておらず、5年位経ってはじめて何とか形になった感がある。それが「のみこみとっつあ」や「そんごくう」であり、その頃から市民会館での観客も増えてきた。中には、子ども劇場でやっているのにも匹敵する、などと高い評価をしてくれる人達もいた。その間、新聞やテレビなどにも時々報道される様になり、楽しみに待っていてくれる人達、ファンが定着してきた。

「のみこみとっつあ」では、現在附属幼稚園の先生の佐藤利佳子さんがヘビの役をやり、例のソプラノでア〜〜〜〜〜とヘビそのものの声を出し好評であった。そして佐藤先生が年長児を受持った時、自分達が学生時代にやった「のみこみとっつあ」のオペレッタを、園児の状態に合わせ所々直してはいたが、そのままの筋で発表した時などはさすがと感心した。和尚役になった園児の名演技に会場中が湧いたのも記憶に残っている。その子は実際も和尚さんの息子であった事をあとで聞いて納得したものだ。「そんごくう」では初めてドライアイスを使用し、その使用法に苦労した。人間が入りそうな大きなポリバケツに穴をあけ、そこに大きなホースを差し込み、バケツの中のドライアイスに熱湯を注ぐとモクモクと白い雲のように出てくるのだが、劇の進行状態よりも早く出てしまったり、

遅くなってしまったりで大変だった。そして熱湯を入れたポットをいくつもいくつも用意した事を覚えている。あの頃の皆は今どうしているだろうか。場面を思い出す度に懐しさで一杯になる。附属幼稚園の上原多恵子先生は確か「そんごくう」のグループだった。そして「長くつ下のピッピ」のおかしなおばさん役は金森純子先生だった。

学生時代にこういう経験をしているから、附属幼稚園の先生方の指導する創作オペレッタは、それはそれは素晴しい。昨年の水野美恵先生の「お空のハーモニー」、矢幡知美先生の「ぼくたちピーマンマン」などの作品は全国どこへ出しても恥ずかしくない素晴しい作品に仕上っている。



はだかの王様（昭和54年）

さて、一昨年の作品「アイ」は私にとっても思い出深いものである。なぜならば、日本音楽教育学会で「総合音楽教育としての創作オペレッタ」と題して発表したからである。それより以前「保育者の資質と音楽教育」と題して全日本音楽教育研究大会で、創作オペレッタの活動は効果があるとの内容を発表した時も、大勢の先生方が興味を持って下さって、大変良い事をしているようだが具体的にどうやったら良いか、との質問が相次いだ。発表を終った時、私の近くに集って来た人の中に河村順子先生がおられた。この先生が私に言った言葉を今でもよく覚えている。思い出すとふき出してしまう。それは「あなた、お若いのによく勉強なさるわねえ。今度何か形になさったら本にして差し上げてもいいわよ。」と。その時私は決してお若くはなかったのだ。ただ髪形が短かめのオカッパだっただけなのである。つい先頃、河村先生が日本童謡賞を受けられたとかで、朝のNHKニュースの中で曽我キャスターのインタビューを受けていたのを見て、又思い出して1人で笑ってしまった。

さて日本音楽教育学会での発表についてだが、作品「アイ」の内容が統合教育についてだったので、オペレッタ以前の問題が多くあり、現代の社会問題でもあっただけに大変むずかしいテーマだった。発表が終ると例によって数人が私の周りに集まり、ビデオを送ってくれだとか、資料を送れだとか言ってくるのだが、その中で「北村先生の発表を楽しみにして来た。先の全日音研の時から興味を持っていた」と言って来た先生がいて、本当にびっくりした。全く冷や汗ものである。その先生とは今でも手紙のやりとりもし、ビデオも送ったりしているが、あとでよく調べてみると、本も沢山出されており年輩のとても偉い先生であった。やはり全国発表は、失敗してもまだ若いのでと理由づけられるうちにやっておくものだとつくづく思った。

さて昨年の創作オペレッタで思い出深いのは何と言ってもNBSフレッシュ11の番組と共に進行した事だ。実際の取材は9月からで、NBSの川野さんが何回も短大へ足を運んで下さった。学生はカメラを向けると逃げるくせに、本当はとても映りたいのだという事も後で知った。

創作オペレッタを11年も授業でやっている大学は全国的にもめずらしいらしく、小学館が度々執筆依頼してくる様になった。「幼児と保育」7月号には14ページも書いたし、こんどの12月号にも書いた。そして今は来年の2月号のを執筆中である。又8月には小学館主催の全国幼年教育研究大会の講師にも呼んでもらい、同じく講師で来ていた作家の灰谷健次郎さん達と同等の扱いを受けて大いにとまどってしまったものである。

同じ様な活動をしている全国の5人の仲間と（中心は熊本大学の先生）この活動を理論づけ、体系づける為に文部省の科研補助費の申請をしたばかりである。うまくいく事を願っている。

（助教授）

最近考えたこと
——岐路に近ずく日本——

千野光亮

経済の高度成長がまだ続いていた十数年前、松本で小中学校の先生に「これからは国際的に通用する人材の育成に力を入れて欲しい」といった趣旨の話をしたことがある。そのとき、多くの先生達が驚いたような、困ったような顔をしたのを覚えている。

しかし、時代の変遷は激しいもので、今日では「日本の国際化」「世界に開かれた日本」などというキャッチフレーズが飛びかい、たいていの人にその意味が理解されている。

ただ、それならわが国が「国際化」という言葉にふさわしい状態に変化できたかといえば、それにはまだほど遠いといわれている。

海外の避難民問題を一つとっても、日本はこれにまだ上手に対応できないでいる。たとえば小県郡和田村で人道的立場からと、村内企業の人手不足対策を兼ね、ベトナム難民を受け入れることにし、村長が今年その村営住宅を建て始めたところ、村民の間に反対の火の手が広がり、結局受け入れ計画はつまづいてしまった。「貧弱な住宅の村民がまだ少なくないのに、ベトナム難民を優先させるのは筋違い」ということだった。この結果、今も村内の企業は人手不足で困っている。

農村では、同じ日本人でも都会から移住してきた人達を“よそもの”としてきらっている。この現状では一足飛びに海外の人達を受け入れられないのは当り前かも知れない。しかし、外国の人達をこうして差別するのは何も農村ばかりでない。

知識人の団体といわれる日本弁護士連合会がわが国における外国人弁護士の活動を容易に認めようとしていないし、外国の新聞記者によると、東京の各省庁で外国人記者に門戸を開放している記者クラブは、まだ数えるほどしかいないという。こういう例をあげると限りがない。

激しい貿易摩擦を緩和するため、最近物財の面では外国に対し垣根を低くし、“差別”がようやく少なくなってきたが、非物財の面ではまだ厳しい状態だ。このなかには歴史や習慣など文化の違いによるものもあるが、外国から見ると、概して閉鎖性の強い印象はぬぐえない。

こうしたわが国の強い閉鎖性は徳川時代の「鎖国」の後遺症からくるもの、と見る学者がかなりいる。鎖国の続いた三百年の間、同じ皮膚の色をした人達がお互いに寄りそい、ほとんど外国人など知らずに暮してきた。これに較べ、開国は明治以来まだ百二十年にすぎない。これでは、鎖国時代に身にしみ込んだ風俗、習慣、ものを見る眼などを改めたり、洗い落したりするのが容易でない。つまり、日本人は鎖国のシッポをまだ重く引きずって生きているわけだ。

しかし、経済規模が拡大し、アメリカについて自由世界で二位になったわが国は、世界各国に製品を大量に輸出し、各国から原燃料を大量に輸入している。つまり、貿易を通じて世界各国と係り合いをもっている。こういう活発な交易は人の交流をも促進するため、その面でも昔のような閉鎖性は許されなくなってきた。言い換えれば、引きずってきた鎖国のシッポを切り落さねばならぬときにきている。

つまり、時代が変化し、それに順応していかねばならないわけだ。そういうふうに時代を変化させたのは、おもにわが国自身で、アメリカやヨーロッパではない。

わが国は経済成長をとげ、アメリカとヨーロッパの支配する今日の世界に割り込んでいった。このため、あるフランスの学者は「気がついた

ら、隣りに金持ちの日本人がせっせと働いていた」とヨーロッパの人達の驚きを語っている。実際はそれほど急に割り込んだわけではないが、わが国の経済の拡大の結果、第二次世界大戦後にできた世界の経済貿易秩序がゆるぎ出し、すでにその一部が崩壊していることは事実だ。

第二次大戦後、ソ連が超大国に成長し、世界の政治軍事情勢を大きく変化させたが、わが国は経済の拡大の結果経済貿易面で大きな影響を与えている、とアメリカやヨーロッパは見ている。それだけに、欧米諸国は日本が大国として責任を果すことを強く要求しているわけだ。

しかし、明治以来欧米に追いつき、追い越せをスローガンに一筋に働いてきたわが国は、ようやく豊かになったばかりで、経済大国という感じは最近持ちはじめた程度だ。だから、自分の拡大した経済力が世界に与える影響、それによる世界の変化などをまだ深く感じていない。

わが国と欧米をはじめ多くの国々とのこういう認識のギャップが今日の経済摩擦を促進し、大きくしている。これを解決するには、改めてアメリカやヨーロッパが日本について認識を深める努力をしてもらわねばならぬが、わが国自身が従来のように「自分がもうけるために世界を駈けめぐってきた姿勢」を改め、世界とともに歩むことが欠かせない問題になっていることを十分考えねばならぬ。

こういう認識をわが国がはやく持ち、世界に向って行動することが大事だ。つまり、自分が時代の変化の仕掛け人であり、その仕掛けた時代の変化の大きな意味を感じ取り、それに対応していくことだ。いい換えれば、わが国が世界の変化に適応能力を発揮し、順応していくことだ。

わが国は歴史を見ても、この変化に対応する適応能力をかなり上手に発揮している。例えば明治維新だ。欧米の侵攻をうまく切り抜けて独立を維持し、その後めざましい発展をとげた。第二次大戦ではつまづいたが、その後の政府の復興・発展は世界が目を見張っている。こういう国の命運に係わる変化に対して、わが国はうまく凌いできたわけだ。とすれば、こんどの変化にもこうした歴史の経験を生かして、閉鎖性を改め、世界に開かれた日本にしていくことができないことはない。

しかし、世界に開かれた日本にするといっても、わが国が各国との違いをなくしてしまうことではない。むしろ、わが国と各国とがその相違をよく認識し合い、その上で交流を促進していくことだ。いい換えれば、お互いに国の文化・習慣・経済などの個性を認めてつき合うことだ。

そこで、わが国が世界各国とどこが違うかといえば、いろいろあるが、一番の違いは経済大国にもかかわらず、貧弱な軍事力しかもっていないことだといえる。経済規模ではおよそソ連に匹敵する。技術力もある。とすれば、わが国はソ連と同じ位の核兵器をもつ能力をもっている。つまり、持とうと思えば持てる核兵器を持っていない。この点が世界からも注目されている。

そこで、わが国が経済大国にふさわしい責任を果すには、すぐ核兵器といわないまでも軍事力の大幅強化に踏み出すかどうかだ。しかし、そうすれば、内外からいろいろ問題がでてくる。

こういうことを避け、平和憲法を守っていくには、軍事力の強化をやめ、世界の貧困撲滅のため発展途上国に対する援助を思い切って強化するというやり方もある。世界に対し責任を果すにはほかにもいろいろやり方はあるが、いずれにしても、国民は国の進むべき方向をめぐって重大な選択を迫られようとしている。これからが大事なときだ。

こういうふうに見ると、やはり世界の中で日本を見据え、考えることが必要だ。十数年前と違って、そういう立場から国や国民を考える人を一人でも増やしていかねばならない。

（本学講師，長野放送解説者）

学生のひろば

華道部員の一人として考える

幼児教育科2年　戸　堀　瑞　穂

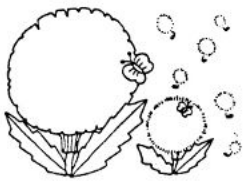
花嫁修業とか花嫁学校という言葉を聞くと、何か時代遅れなニュアンスを感じて、拒否反応を示したくなる女性も少なくないと思います。

最近の若い独身女性について調べた結果を見ますと、お花・料理・洋裁・お茶・編み物がベスト5にランクされているという事です。ではこうした習い事が実際にどれだけ役に立つものかとの問いに対し、料理・洋裁・編み物は習った人の約半数が「役に立つ」と答えており、「全然役に立たない」が三分の一強。お花については「少し役に立つ」といった人も、「部屋を飾れる。ただし花が高いのでなかなか買えない」と注釈つき。お茶にいたってはもっとひどくて、23人中で「役に立たない」が18人、「役に立つ」はたったの1人でした。ひと昔前、花嫁修業の必修科目と目され、多くの女性が打ちこんだお花とお茶は、今や結婚前に是が非でも習わねばならない、といったものでもなさそうです。とは言っても、少々残念な気がします。

私は、高校までお花というものには縁遠い人間でした。しかし、友達が学校へ花を持って来てくれる度に、うまく壷に入らず苦労し、華道の世界を憧れる事もありました。何度となくバランスの悪い活け方をしては、せっかくの美しい花の姿を無にしてしまう事がありました。その様な事と母親の強い勧めもあり、私は短大へ入学してから華道部へ入部しました。始めて二年足らずではあるが、活け花には思ってもみなかった多くの魅力が含まれている事を知りました。花にも、枝にも、人間に同じ顔がない様に一生に一度巡り合うだけで二度と同じものには会えません。花を活けるという事は、二度と会えないものと取り組み、そして出会いを大切に心にとどめる事です。静の世界へ入り、物言わぬ花材と花器を使って一つのかたちに活けるわけです。自分の容貌やスタイルを鏡に向かってメイク・アップやファッションで創り出していく様に、花や枝と語り合ってはよく研究し特徴をとらえます。何が特徴なのか、何が欠点なのかをつかみ、特徴を強調するのはもちろん、欠点とされるものもうまく生かしたり除去するなど研究し工夫します。この作業をする事によって、花に含まれた命のあるかぎりを引き出し、その瞬間、みごとに開かせるのです。その空間には、家族がお茶を飲み語り合う団らんをさえ感じさせます。又、その様な心を持ちながら、未来ある子供の個性を生かし、見守るかの様に花材を生かす事が必要かと思います。そんな心のゆとりの中から、動きのある、広がりのある〈美〉を得る事が出来るのです。

まだまだ得る事の多い勉強の場として、ゆっくりと時間をかけて、技術と姿勢を学んでいこうと思っています。

又、これは花を活ける時だけでなしに、食生活の面でも、幼児教育など様々な面からも必要な事と言えると思います。自然から持ってきた命ある美しいものを人間の手によって磨き上げ、創り上げたものは、いつの時代も尊いものではないでしょうか。決して、花嫁修業などとは考えてほしくない、多くの方に味わっていただきたいものです。自然のものを使って〈美〉を表現する事は、人間にしか出来ない素敵なことだと思います。



個人と集団

国文科2年　小池文子

集団とは、一体何でしょうか。言葉の意味だけからいうと、個人の集合したものといえば、それで一応の説明が成り立つように思われます。しかし、この説明には肝心なことが欠けています。それは、「有機的な集合」ということです。人の数だけが寄り合っても、これを集団とは言いません。有機的な意識を持ち合った人々の集合を集団というのです。

実際に即していえば、集団とは、家庭であり、市区町村都道府県といった行政区画に住む人々であり、あるいは学校、各種企業体に属する人々です。その他にも種々なものが考えられます。

集団は個人によって形成され、個人がなくては集団は成り立ちません。それゆえに、個人は集団に優先する、という見方は、充分考慮されなければならないことであろうと思われます。しかし、集団は、個人単位では実行や実現の不可能な事柄を可能ならしめる力を持つものであって、それが個人に大きな福利となって再び戻ってくるのです。

そのために、集団は個人に対して、共通意識への目覚めを呼びかけ、共通の目的のための実際行動を要望するのです。

この時、往々にして、個人と集団との意識の不一致が生じ、時には深刻な対立関係にまで発展することがあります。最も、この対立は、集団に対して不一致を主張する個人が集合して（これも集団である）対抗する場合が多いといえます。

さて、個人と集団のどちらを優先し、尊重するのが正当なのかという問題は、実は人類の発生と共に生じた問題であって、長い歴史の中において、絶えず考えられ論じられてきたことなのです。

それ程、深刻で重大な事柄なのですが、それは「卵が先か鶏が先か」ということと似ている面があります。卵を個人、鶏を集団に置き換えて考えてみることができると思います。

鶏がいなければ卵はないともいえるし、卵がなければ鶏はいないともいえます。これと同様に集団がなければ個人はないともいえるし、逆に個人がなければ集団はないともいえます。

これは、共に真理であると思います。それが人間というものであって、この真理に対して、個人の側からであれ、集団の側からであれ、疑問の念が抱かれ、対立し抗争に発展すれば、人間性の喪失という危機にまで及んでしまうことになります。

一方、卵と鶏とでは、その発生の順序は、明らかに卵が先であって鶏が後です。それと同じく人間の社会においても、その発生の順序ということからすれば、個人が先で集団が後になります。

しかし、これはあくまでも発生現象の前後ということで、存在そのものの比重の大小に関わる事柄ではないのです。

以上のように、私は個人と集団について考えてきましたが、結局、個人と集団とにおいて、どちらが優先するのかは言いきれません。ただ私なりにいえることは、個人と集団とは、同じ比重にあり、運営などの面では、時に個人を先にして集団を後にする、あるいはその逆になる事態が生ずることはありうるということです。しかし、その存立の根本においては、大小前後の差というものはなく、維持していくためには共に相互の尊重と、意志の疎通が必要なのだと思います。

私の読書と大学生活

幼児教育科1年　笠　原　聡　子

下宿生活が始まって以来、読書が楽しみの一つである。上田女子短期大学には、設備の整った附属図書館がある。この恵まれた環境を活用しない事は、「宝の持ち腐れ」のような気がする。教育者を目指す私達学生にとって、本は欠かせないものである。本によって得る知識は、何にも代える事は出来ないと思う。

今年、6月に行われた児童文化研究会。上智大学教授の村松先生の講演「子供の世界の東と西」－下村湖人の『次郎物語』とルナールの『にんじん』－がとても印象に残った。恥ずかしい事に、私は下村湖人の『次郎物語』を知らなかった。早速、図書館で探し読んだ。次郎を取り巻く人々や環境は、常に彼の成長過程に影響を与えた。易しく書かれた文章からは、次郎の心理がそのまま伝わり、教育のあり方を教えられ、考えさせられる。しかし何よりも、運命と闘い、生きる次郎のいじらしく頼もしい姿に感動した。又、講義の中で紹介された太宰治の『晩年』にも感銘を受けた。短い文の中にも感じさせられる何かがあるから不思議だ。ストーリーの単なる面白さだけではない、表現や言葉の美しさを知った。同時に、日本語の表現の豊さ、難しさを以前よりも強く感じた。

現在、この本がきっかけとなって、日本文学全集（全88巻）を読んでいる。学生として文学に対して一層の興味を持ち、日本文学を常識として知る必要があると思うからである。まだ数冊読んだ程度であるが、出来るだけ時間をつくり、1冊でも多く読みたいと思っている。

今年の春、父が進学祝いにと、辞典3冊を買ってくれた。その中の1冊は、岩波書店の『広辞苑』である。想像以上の厚さに驚いたが、飾りにならないよう活用したいと思い、それ以来、疑問と思う言葉は、この『広辞苑』を開き調べている。本には多くの難しい言葉や漢字が出てくる。その都度、調べなくてはならないのだが漢字は調べても、言葉はつい曖昧に読み流してしまう事が多い。こんな事では、「読んだ」とは言えないだろう。

最近、NHKで「ことばの1分メモ」という5分位の番組が流されている。本来の意味を間違って使っていた言葉が、意外にたくさんある事に気付き、とても勉強になっている。

入学したばかりだと思っていたら、前期の試験がもう終わってしまった。1日が過ぎるのが速いと思いながら、この大学に入学が決まった時、ある先生より頂いた色紙に書かれた漢詩を思い出した。

観学の詩　　未喜

偶成　少年易老学難成
　　一寸光陰不可軽
　　未覚池塘春草夢
　　階前梧葉已秋声

－まだ若い若いと油断をしている内に、いつしか年をとってしまうが、これに反し学問は、なかなか完成しにくいものである。であるから、ごくわずかな時間も、ゆるがせにしてはいけない。池の土手の若草が、夢心地から覚めきらぬうち（将来をあれこれと夢想して、大半をムードにひたっているうち）に、早くも夏が過ぎ、秋になり、階段前の青ぎりには、もう秋風が訪れるようなものである。（早くも人生を、半ばを過ぎて、初老の声を聞くようなものである。）－という意味だそうだ。この言葉は、今の私にぴったりである。短い大学生活は私にとって、とても貴重な時間である。わずかな時間も大切にして、悔いのない大学生活を送りたいと思う。

文化遺産の古典

国文科1年　染　野　千代子

本というものと拘わって十九年が過ぎた。まだ字も読めない頃、母に童話を読んでもらった幼稚園時代、あまり本など読まず、遊んでばかりいた小学校時代、考古学やＵＦＯの本ばかり読みあさった中学校時代、ラブロマンスばかり読んだ高校時代、それが今までの私の読書歴だ。今現在読むのは古典と俗にいわれている類だ。古典を読み始めた理由は簡単。みんなが読みずらいといって敬遠していたからだった。私にはへそ曲りの所があるらしい。人がいやがる事などに昔から興味をそそられた。

ともかく読み始めてみると、簡単とはいえないが、私の好奇心を満足させてくれた。いろいろな国の古典があるが、日本の古典は特に四季があざやかで、やさしく包みこんでくるようなところがある。それに、古典を敬遠するのは、とても損だと思う。私達の遠い先祖が残してくれた大切な文化遺産なのだから。

読むのに少し首を傾けたくなるような枕草子。今からおよそ千年ぐらい前の平安時代に書かれた随筆だが、千年前は、当時流行の最先端をいくエッセイだったんだなあと思えば、おもしろい読みごたえのある本だ。

私達のまわりには、それと知らないで読んでいる古典がわりとある。竹取物語（かぐや姫といったほうがわかりやすいか？）、浦島太郎、一寸法師、ものぐさ太郎などがそれである。特に竹取物語などは、最古の物語といわれ九百年前後につくられている。他も室町時代につくられたという古さだ。

古典という概念を捨てると、今現在読んでも、何の違和感も与えられないで、スムーズに心の中に入ってくる。とっても新鮮で時のへだてを感じさせない。特に私の心の中に入ってくるのは恋物語だ。高校時代によくラブロマンスを読んだせいか、恋愛物語がよくわかる。偉大な二人の男性に愛され心が揺れ動く額田王の歌、源氏物語の生霊になっても源氏をしたう六条御息所、自分の心をひっしで止めようとする空蝉、夫の浮気に悩み苦しむ道綱の母の蜻蛉日記、心に忠実なため悪女といわれた和泉式部の和泉式部日記などいろいろあるが、いまの私達よりずっと人を愛する気持が深かった時代の人々の思いがよくわかる。伊勢物語のいろいろなパターンの恋物語も私は好きだ。ほろ苦い恋、せつない恋などあるが、ただ読むのだけでなく、登場人物の役を変えて想像するのが好きだ。ワキ役というか、別の人の観点から見たこの恋物語はどうか？を考えるのである。例えば、源氏物語の六条御息所などは源氏の愛する人を、生霊となって殺してしまうが、御息所をメインに考えてみると、前はあんなにしたってくれたのに、他の人に恋の相手をかえてしまう源氏の優柔不断な行為など源氏を悪者に変えてしまうことさえできる。高校の頃も、それがおもしろくてよくラブロマンスを読んだ。主人公を変えると全く違う話になってしまう。だからよけいにおもしろい。

人を想う気持は今も昔も変わらない。ギャップの差が少ない恋物語から古典を読むのを勧める。一度読んでみないと先には進めない。同じ日本人が書き残したものだから、私達が理解していなければいけないと思う。外国古典を読むよりは、すんなり心に入ってくると思う。私達は、文化遺産を残してくれた祖先の遠い末裔なのだから。

【図書館ガイド】

レファレンス・ブックの探し方

この図書館ガイドは図書館をより効果的に利用できるように種々のことを解り易く説明するためのものです。今回は「レファレンス・ブック」について簡単に説明します。

1. はじめに

私達は毎日あふれるほどの情報の中で生活していて、世の中の流れや、動向に取り残されないためにテレビ、新聞等でいつのまにか、何となく情報を取り入れています。が、それ以上の情報への積極的対応はどのようにしたらよいでしょうか。それぞれの専門により、情報の質は違っても、知りたい、確かめたい、疑問を解決したい等、数限りなくあると思います。

しかしこれら疑問点が生じた時、あなたはどうしていますか？

現在はテレフォン・サービスとか、法律相談とかたくさんの情報サービス（業）が行なわれています。が、ひとつ図書館に聞いたり、図書館で調べてみませんか。

図書館は「本を貸す」だけでなく、これらを回答してくれる仕事もしています。このことを「レファレンス・サービス」と言っています。

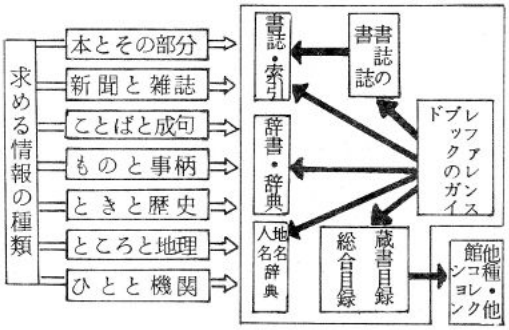
2. 何を求めるか、何から求めるか

今持っている疑問を自分自身で手っとり早く解決しようとする時、百科事典のようなあらゆる事が出ている本があれば便利です。しかし、すべてに詳しくというわけにはいきません。

そんな時「何をみて」「何を探せばよいのか」を知る必要があります。

これら「調べるための本」を＝「レファレンス・ブック（参考図書）」と図書館では呼んでいます。レファレンス・ブックには書誌的なレファレンス・ブック＝書誌・目録・索引類と、一般的なレファレンス・ブック＝辞典・事典・便覧・図鑑・年表・年鑑・白書・統計等があり、大まかにこの2種に分ける事が出来ます。

それぞれの説明は後まわしにして、レファレンスの求め方を分りやすくしたのが次の図です。



3. レファレンス・ブックの探し方

では具体的に説明しましょう。

① 本とその部分

本の著者・書名・出版地・出版社・出版年・ページ等を書誌的データといいます。これらを調べるためには次の様なものがあります。

求める情報の種類
- 本の書誌的事項・価格 → ← 販売書誌
- 入手先 → ← 全国書誌
- 本の内容・要旨 → ← 注解書誌
- 特定の著者の著作 → ← 個人書誌
- 特定の主題の著作 → ← 主題書誌
- 翻訳書の書誌的事項 → ← 翻訳書誌
- 官公庁の出版物 → ← 政府刊行物書誌
- 叢書・論文集所収文献 → ← 叢書・集成索引
- 本その他の資料の所在 → ← 総合目録
- 個所の確認 → ← 蔵書目録

② 新聞と雑誌

新聞や雑誌は、定期的に間隔をおいて発行されるので、「逐次刊行物」といわれます。

これらにも次の様なものがあります。

求める情報の種類

- 年報・新聞・雑誌の書誌的事項・内容・価格 →← 逐次刊行物のリスト
- 特定の雑誌収載の論文記事の確認 →← 総目次・総索引 雑誌記事索引
- 不特定の雑誌収載の論文・記事の確認 →← 雑誌記事索引
- あるニュース・トピックに関する新聞記事 →← 新聞記事索引 新聞資料集成
- 論文内容の要旨・注解 →← 抄録誌
- 年報・新聞・雑誌の所在個所の確認 →← 総合目録 雑誌目録

③　ことばと成句

「九」と書いて何とよみますか？“キュウ”や“ク”ではありません。「イチジク」です。といって笑い出した人がいませんか。これらことばや、字のことを調べるには次のようなものがあります。

求める情報の種類

- ことばの読み方・書き方・語義・用法・語源 →← 国語辞書 特殊辞書
- 漢字の読み方・書き方 定義・熟語成句の意味 →← 漢和辞書 難読語辞書
- 外国語の綴字・発音・語義・用法 →← 双解辞典
- 古語・新語・外来語・方言の読み方・意味 →← 古語・新語・外来語・方言辞書
- 特定のことばの発音・同(反)義語・語源 →← 特殊辞書 国語辞書
- ことわざ・格言・成句引用語の意味・出典 →← 諺語・名句辞書 用語索引

④　ものと事柄

「もの」と「こと」に関するもののうち、諸現象、事物、生物等の名称、内容、性質、特徴、種類、用途等にわたって知識を得るには次の様なものがあります。（ことば、地名、人名は別記）

求める情報の種類

- 不特定分野・主題の事物・現象の一般的知識 →← 百科事典 一般便覧
- 特定の分野・主題の事物・現象の専門的知識 →← 専門事典 専門便覧
- 方法・規則・要約・手順 →← 一般便覧
- 記録(レコード)・統計的数値等の各種データ →← 統計便覧 総合年鑑
- 事物・動植物の種類・形状・色彩・構造など →← 図鑑 図譜 一般便覧

⑤　ときと歴史

過去に起った諸事象に関する手がかりをえるものには次の様なものがあります。

これらは①、②とも深い関係があります。

求める情報の種類

- 不特定分野の事件の由来・原因・経過・結果 →← 歴史便覧 歴史事典
- 特定の分野の事件の由来・原因・経過・結果 →← 各種の専門事典 各種の専門便覧
- 特定の年月のできごと →← 各種主題の年表
- 特定の分野・地域の事項の近年の推移・概況 →← 専門主題年鑑 地域年鑑
- 各種の分野・地域の事項の近年の推移・概況 →← 総合年鑑 百科辞典年鑑
- 最近のトピックの概要 →← 新聞記事索引

⑥　ところと地理

我々は地球上のあらゆる所のことを知りたいと思っています。これらの知識を得る場合です。

求める情報の種類

- 地名の読み方・書き方 →← 地名事典
- 所在場所 →← 難読語辞書
- 地名の由来・人文地理 →← 地名事典
- 自然地理的特徴 →← 地理事典・便覧
- 地名の所在場所・距離 →← 地図帳
- 面積・方位 →← 旅行案内書
- 観光ルート案内・市街図・名勝旧蹟・産業 →← 旅行案内書 地域年鑑
- 風土などの地理情報 →← 地理事典・便覧

⑦　ひとと機関

「東」さんは“アズマ”か“ヒガシ”か、又、その人の伝記的事項を知りたい時、すべて「ひと」に関する事を調べたい時等、次の様なものがあります。

求める情報の種類

- 著名な人物の伝記事項 →← 一般人名事典
- 専門分野で著名な人の伝記（履歴）事項 →← 専門人名事典 各種の専門事典
- 現存者の履歴事項 →← 人名鑑
- 官庁・法人等の所在地組織構成・活動状況 →← 団体名鑑 機関名鑑
- 伝記(履歴)文献・年譜 →← 伝記索引
- 特殊で読みにくい姓名の読み方・書き方 →← 難読姓名辞書 難読語辞書
- 血縁関係その他の系統 →← 系譜・家系事典

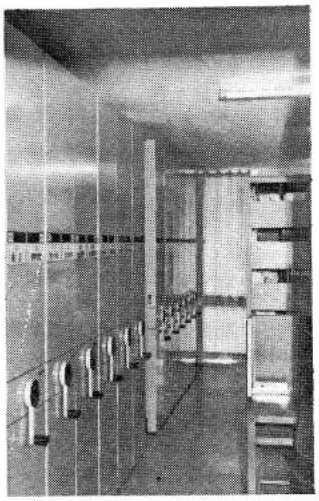
4. まとめとして

文献情報を求める場合は、しばし山登りにたとえられます。一つの山を登る場合、頂上をめざすルートがいろいろあって、ルートによっては危険な岩場もある。こんな時は回り道でも着実な方を選んだ方がよい。これと同じで、回答を求めるルートは様々でも、利用する道具が違うのです。この道具と技術を組み合せていろいろとステップをふむ事が大切です。

ハーバード・ガージョイが、「明日の文盲とは、（中略）学ぶ方法を学んだことのない人のことであろう」と語っている。効率的な探索方法を身につけてほしいものです。　（長張）

〈参考〉

『レファレンス・ワーク』(小田泰正)　日本図書館協会
『レファレンス・ブック』(長沢雅男)　〃
『日本の参考図書』(日本図書館協会)　〃



図書館ニュース

図書館は国文科が増設された時、約7000冊の図書が入ったり、その後の国文科図書の増加により急に書庫が満杯になってしまいました。

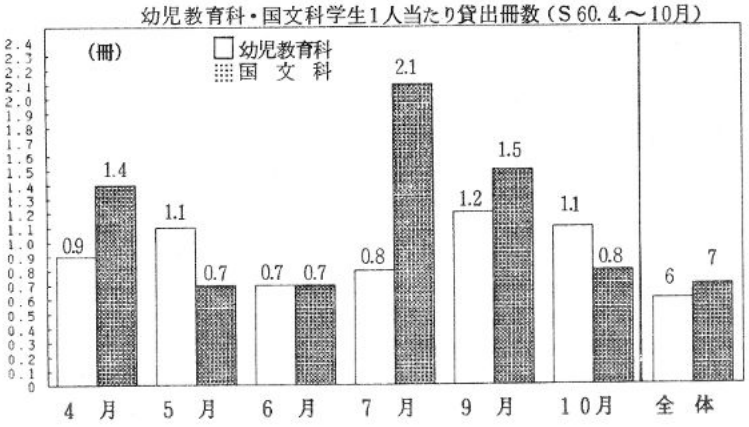
そこで本年は、ようやく書庫に移動集密書架（スタック・ランナー）が入りました。写真にみられるようにハンドル式で動きます。蔵書容量も約3万冊と今までより3倍にふえます。

尚、書庫にどんな図書があるかは目録で検索し、探して下さい。書庫へ入るにはカウンターに申出るようにしましょう。

本年度の利用状況（4月～10月）

本年度の館外貸出状況は各学科別に統計をとっています。4月～10月までの利用状況は右のグラフのような状況です。（各学科の学生数が同数でないので1人当りの利用冊数で出してあります。）

幼児教育科・国文科学生1人当たり貸出冊数（S60.4～10月）



総貸出冊数

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	全体
幼児教育科	239	301	228	221	307	279	1575
国文科	137	87	67	208	156	83	783

(冊)

× × × ×

編集後記

世界の平和と福祉の確保には教育とくに人類の叡知をあつめ情報学習の中核となりうる図書館こそ必要の声を受け館活用に全力を投入し励んだ本年も惜しまれて去ろうとしている。

ここにたよりをまとめ12号をえた。ひとえに玉稿をいただいた諸先生及び進んで寄稿に協力の学生諸姉さらには全学園の方々のお力添えのためとお礼を申し上げたい。

念願の増築も成り面目一新の学園。素晴しい人材を続出するよう心して精進したい。（清水）

上田女子短期大学　図書館だより　第12号　1985.12.14 発行
編集　上田女子短期大学図書委員会
発行　上田女子短期大学附属図書館